



「174のころ」

ある日の夕方、子どもたちに帰り支度を促しながら掃除をしていたとき、立てかけていたほうきがパタンと大きな音をたてて倒れてしまいました。「ごめん、びっくりしたね～」と謝ると、Sちゃんが「先生、大丈夫？けがしなかった？気をつけてね！」と、逆に心配してくれました。Sちゃんの優しい言葉にほっこりしたのと同時に、そんなふうにとさらりと自然に人を気遣う言葉が出たことに驚きでした。きっと私だったら「大丈夫？」だけで終わっていたらと思うと、恥ずかしく思いました。

先日2歳児さんと一緒に散歩をしたときのこと。初めて小さい子をリードしお兄さんお姉さんとして自覚を持ちながら手をつないで歩いてくれました。2歳児さんが土手側になると、「危ないから場所変わろう～」と気遣ってくれたり、途中座り込んでしまう友だちを待ってあげたり、優しく声をかける姿が見られました。そんな中、服にセンダン草がたくさんついてしまった2歳児のKくん、手を繋いでいたHちゃんが気付き「大丈夫よ！取れるけんね。」と言いながら必死で取ってくれていました。そして取りながらも「痛い？嫌よね。」「取れんやったら園で取ろうね。」と、Kくんの気持ちを受け止めながら優しく接してくれました。異年齢での活動が見られた心が温かくなる光景でした。

どちらの出来事も、誰かに言われたからやったことや言ったことではなく、子どもたちが相手のことを思っている行動や言葉かけです。それを自然にできるということは、子どもたち自身もそういうことをやってもらったり、言葉かけをしてもらった経験があるからこそできるのだと思います。毎日子どもたちと接している私たちの言動は、良くも悪くも子どもたちの鏡になっていると思います。子どもたちにとって良い鏡となり、子どもたちの心の育ちに寄り添う保育に努めようと改めて思いました。





遊びに没頭するAくん。思いうにいけない場面にも何度でも直面します。その度に音程の音がさびびりなく手を使ってくれます。1人目のさいご一場面ですが、その中に、出会いと別れが繰り返されているように感じました。道徳の中には、こうして本気で取り組むとき、自分なりの思考や葛藤、具体的な出会い、人との協力などが繰り返り繰り返してきます。一歩踏み出すからこそ困難な場面にも直面し、その子ども自身が果敢に向き合っていくとします。千歳頃のAくんは、互いの力を借りて達成感を味わうことができました。おとこの出来事がAくんの経験値となり、次は自分のイセの誰かが互いの力とどうしよう。こうして子どもたちは日々、互いに育ち合っています。

先月行われた The One in the Garden では、天候不良に伴う急な変更にも関わらず大勢の方にご参加頂き有難うございました。入園された日を思い出し、ぐっと成長されたお子様の姿に何とも言えない気持ちになられたこととお察しします。行事の度に「いつの間にか」という言葉を思います。

当日に向けて頂いた、我が子への応援メッセージにはそれぞれの保護者様の想いが込められていて、どれもとっても素敵だなあと眺めていたときのこと。メッセージにお子様の似顔絵を描かれていた保護者様が通りがかられたので、すごく似ていらっしゃいますね、とお声がけしました。なぜこんなに似せて描けるのですか、とお尋ねすると、少しはにかまれた、でも、とびきりの笑顔で「愛ですかね。」と答えられたのです。その笑顔と言葉に触れた瞬間、なんて幸せなご家族なのだろうと思いました。

先日、ある講演会でどんな状況でも幸せに生きられる子どもにはある法則があると聞きました。それは、安心感。その安心感とは、全ての子どもが持つ「無条件に愛された瞬間」から生まれ、そのとき、周りの大人がしていただけること、思っていたら感情を周囲の大人が再び抱くこととつくられる。全ての子どもが持つ「無条件に愛された瞬間」。それはきっと、その子が生まれた瞬間ではないでしょうか。

初めて我が子を抱いた瞬間、腕の中の小さな姿にお家の方がかけた願い。その、言葉を超えた、生涯に渡るであろう恒久の願いを、お家の方から離れてお預かりする間に代わって守り抜くこと。それこそが私たち育ちに寄り添う者の存在する意義だと、私は思うのです。

ピクニックデーで、さくら組の保護者様がお子様に向けてそれぞれの想いをお話され時間があり、どの方の言葉にも「この子がいたから」というメッセージが込められていて、心が熱くなると同時に襟を正す思いで拝聴しました。

皆様の願いと共に在るお子様を、卒園式の後、親子で園の玄関を出て行かれるあの瞬間まで私たちは大切にお預かりさせて頂き、全ての子どもが持つ「無条件に愛された瞬間」を「時間」へと変える一助となれたらと存じます。

